



第28号

(年2回発行)

発行所

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

P.2 亀井忠雄先生にお話を伺いました

P.6 俳句と喜多流と福山

喜多真王

P.8 祖父からの贈物

ナンシー・ロス

祖父の書付け、師との石橋

喜多流職分 大島 輝 久

能の本格的な修行をする為に上京し今年で十九年目。十八才で上京したので福山より東京での生活が長くなった訳です。上京以前の稽古は全て祖父の久見がしてくれていましたが、当時全く稽古熱心でなかった私はただ言われた事をこなすだけで、祖父に対して質問をするような事は一度もありませんでした。当時の自分にとって、能とはそのまま祖父の事でした。

今年の八月、三和の森光信寺新能で「雷電 替装束」を勤めました。この替装束という小書が付くと常の型とは変わる動きが幾つかあるのですが、その中にどうにもやりにくさを感じる箇所がありました。祖父は非常に筆まめな人でしたので何かヒントがあるかもしれないと思い実家に帰った際、祖父の残した書付けを読んでもみました。するとその箇所に「替装束の時は云々となるが、良くないのでは？」と書いてあります。「そうか、祖父も自分と同じ疑問を持っていたのか。」福山を離れ十九年経って、やっと祖父と初めて能の話が出来たような気がして胸が熱くなりました。

さて、二年以上前に計画した大島能舞台創建百周年記念能が近づいてきました。この百年間で私自身が舞台活動に携わったのは、ほんの二十年程に過ぎません。私の伺い知れぬ時代に幾多の苦難を乗り越えた先人達に思いを馳せる時、感謝の気持ちと同時に自分自身もその歴史の通過点の一部

に過ぎぬ事を痛感しています。

この度の会で、上京以来ずっと教えを頂いている恩師、塩津哲生先生の胸を借り「石橋 連獅子」を勤めます。「石橋」はその昔暫く上演が途絶えていたのを流祖の喜多七太夫が再興し、喜多流にとつては特別に思い入れのある曲です。静かな動きが多いと思われる能の中にあつて最も美しく強い舞である獅子は、能の一つの頂点を示す物です。塩津先生が一生を懸けて追い求められる「強さの果てに有る美」を私も目指し精一杯勤める所存です。これからも続く能への皆様の変わらぬ御支援を心よりお願い申し上げます。



仕舞「八島」大島輝久

亀井忠雄先生にお話を伺いました



聞き手 大島輝久・衣恵

亀井忠雄氏

1941(昭和16)年生まれ。

能楽師大鼓方葛野流宗家。

父・亀井俊雄(人間国宝)および川崎九淵、吉見嘉樹に師事。

1949年、7歳の時『熊野』で初舞台、『翁』を抜く。

1964年、日本大学芸術学部を卒業。

2002年、重要無形文化財として各個指定(人間国宝)をうける。

文字通り能楽界最高峰の大鼓方として活躍を続けている。

2004年紫綬褒章受章。新宿区名誉区民。

2012(平成24)年、春の叙勲に於いて旭日章綬章受章。

この度は大鼓葛野流宗家、人間国宝の亀井忠雄先生にインタビューをさせて頂きました。忠雄先生は昭和四十六年に建て直した現在の大島能楽堂舞台披きと、本年の大島能舞台創建百周年記念能の両方にご出演頂く唯一の御囃子方でもあります。

修行時代の事、当時の名人達との壮絶な舞台と稽古。喜多流とのお付き合いなど貴重なお話を長野県軽井沢町にある忠雄先生の別荘にてお伺いしました。

◆忠雄先生が青年期の頃、喜多流にはどのような印象を持たれていましたか？

忠雄

そうですね、喜多流は当時から随分と盛んな流儀だなっという印象がありますよ。もちろん人の数でいえば観世流や宝生流には及ばないんだけど、粒揃いというのかな。喜多六平太という方を筆頭に、喜多実さん、後藤さん、粟谷さん、友枝さん、それぞれに子供達がいて。人材という意味では今の喜多流より豊富だったんじゃないかな。

◆お幾つの頃から喜多流の舞台にお出になられましたか？

忠雄

私は早くから楽屋には入っていたし、もう高校生くらいの時には随分と喜多流の舞台は打たせてもらいましたよ。

当時の喜多流には「十番会」という稽古会があつてね。これは喜多実さんが自費でなさつていた事だけれども。若い三役の人間を呼んで稽古会をして、終わったら目黒の「とんき」で豚カツをご馳走してくれるんだ。十番会で喜多流の事は随分と勉強させてもらったし、喜多実という人を見て「これが大夫(たゆう) っていうんだなあ。」と思つたよ。家元は何人もいるけど、大夫つてのはそういない。家元と大夫は違うんだよね、私に言わせれば。

◆当時の印象に残っている舞台はありますか？

忠雄

二十歳くらいの時かな、後藤得三さんの「三輪神遊」の役が付いてね。なかなか出ない小書の曲だから同年代の囃子方からは「忠雄さんだけあんな大曲を打つて。」なんて言われたりもしたけど。当時は人が少なかつた事もあるし、親父や葛野流の先輩方が喜多流の舞台をよく勤めていたからそのお陰だよ。

そういうえば君たちのお祖父さんの久見さんが「鬼界島」を舞われる時があつてね。私は親父のお供で行つていたんだけど、久見さんが面を付けようとしたら六平太師が急に「俊寛が面なんて付けちゃダメだ！」なんておっしゃつてね。みんなビックリだよ。鏡ノ間で、親父が久見さんに「どうするんだい？」と聞くんだけど「家元がそうおっしゃるので。」って結局は直面(ひためん)で舞われたんだよ。

今ではちよつと考えられない事だけれども、

まあそんな事もある時代だったんだよ。

◆今の福山の舞台を祖父の久見が建てたのが昭和四十六年です。その舞台披きに忠雄先生に御出演頂いています。父、政允の道成寺の披きですが、その時の思い出をお教え頂けますか？

忠雄

そう、君たちのお父さんが「道成寺」を福山で披くつて言うから行ったよね。まだこつちも二十代、生意気盛りだよ。

ただ当時は私自身が福山という場所を知らないし、そんな所に能楽堂があるなんて思わないから、何で地方で道成寺を披くのかな？ くらいに思つて行つたんだよ。でも、行つてみたらキチツと客席のある立派な能楽堂だろ？ まあ、驚いたよ。「地方にもこんな物を作れる力のある人がいるんだ！」と思つてね。

ただ明日が本番だつていうのに、楽屋で大工がトンカントンカンやっているんだよ。「オイオイ、間に合うのか？」って思ったのは、よく覚えている。

◆当時、忠雄先生はお父様の俊雄先生を亡くされて間も無くてすね。

忠雄

親父が亡くなつたのが昭和四十四年だから、その後の二、三年というのは周りの人から随



能「白田村」シテ喜多実
大鼓 亀井忠雄 小鼓 穂高光晴 笛 森田光春
(1971.9.24) 大島能楽堂舞台披き

分と色んな事を言われたりもしてね。ほら、こつちも生意気だったから。でも、当時の本当に芸の力を持っている人達が私を助けてくださったんだ。

観世寿夫さんには三番目物は全て、老女物に至るまで教えて頂いた。寿夫さんは親父に大鼓を習っていたから、「俊雄先生がなぜあの場面であのように打たれたか。」という事まで話してくれた。

また、宝生流での事だけど、親父が倒れた直後に宝生の別会で「景清」が代役で付いたんだ。そうしたら当時、地謡を謡わせたなら天下第一の高橋進さんが「解つてると思うけど、宝生の景清は他と違うからね。ちよつとおいで。」って言うてくれてね。その頃は宝生の謡なんてまだ解らないから謡本を広げて一曲謡うんだけれど、高橋さんから「うんうん、まあまあ。」なんて言われて部屋を出たら、今度は人間国宝の近藤乾三さんが待っていてね。「次はいつ稽古に来られる？」って言われて、次は近藤さんの稽古だよ。また、謡本を開こうかと思っていると、近藤さんはこつちの事なんか構わずいきなり最初のツレの謡から「消えぬ便りも〜」と謡い出しちゃうんだ。「それならこつちも謡本なんかいらねえ！」って、直ぐチョーンと打出したけどね。

それは凄いい稽古だったよ。親父が倒れた後、親父の仲間達が「今度はこの子に」って一生懸命稽古してくれたんだ。有難かったね。

◆その頃と現在とでは能楽界はどのように変化して来たと思われませんか？

忠雄

今は何でも民主主義で平等にやろうとするし、催しが多くなったから「切符を売った者勝ち」みたいになってきているけど、それで本当に良いのか…、と思う事もある。

まあ、結局舞台というのは戦いだからね。親父の世代の人達、さつき言ったような方々は戦士だったよね。舞台が激しかった。

老女物なんて見ていると「こんなにやつちやつていいのかな？」と思う程だった。でも、それは「芸位」なんだよね。芸位がある所までいつてしまうと、老女物でも「悲しい」とか「寂しい」なんて気持ちじゃやつていないんだよね。どんなに激しくやつても老女に見えてしまう、聴こえてしまう。そういう舞台を私は親父の背中越しに見て来た。芸つてそんな物なんじゃないかな。

◆近年は謡本を読込み、より劇的な舞台を目指す方が増えてきているように思います。そういった方向性はやはり観世寿夫さんの影響が大きいように思いますが。

忠雄

寿夫さんはやつぱり特別だったよね。ある時「我が家の葛城のキリの謡には特殊な節使いがあつてね。あれは大和民族と葛城民族との違いから来ているんだ。」なんておっしゃるんだ。そんな事言われたつてねえ。こつちは大和民族と葛城民族の違いなんか解らないでしょ。

寿夫さんの思考はそんな所まで行っていたんだ。確かに天才だったけれど…。でも、天才

なんて言うとなの方に怒られるかもしれない。それはそれは、物凄い努力をされた方だよ。人の何十倍も努力されたんじゃないかな。

君達がいま四十才くらいでしょ？ その頃の寿夫さんの努力たるや凄まじかったよ。青山の舞台にいた時、偶然、寿夫さんが稽古をされている時があつてね。一人で「弱法師」の稽古をされていたんだけど、おつかないくらいの緊張感なんだ。一人でやつているのにだよ。おつかないんだけど目が離せなくて「見ちゃお。」って覗いてた。

あれだけの人だったから寿夫さんについては今でも色んな事を言う人がいるけど、私は聞かれたら「あの人の努力を見ないといけない。あれだけの努力を出来る人間が今いるかい？」って答えるようにしているんだ。

◆忠雄先生は常日頃から謡の重要性を我々に説いて下さいますか？

忠雄

私は子供の頃から師匠の川崎九淵先生から「謡を上手くなれ、上手くなれ。」と言われ続けたからね。川崎先生ご自身はダミ声だったし、謡はそんなお得意ではなかったから余計にそう言われたんだと思う。

子供の頃は謡を謡うといつても「既に落居(らつきよ) し〜」なんて謡っていて「食い物のらつきようがどうしたのかなあ？」と思う程度からこの手組が付いているんだとか、この言葉だからこんな掛け声を掛けるんだという事がだ

んだん解ってくる。

我々囃子方は各流儀の色んな謡を相手しなきゃならないんだけど、詰まる所自分の中でしっかりと謡が謡えていれば、相手がどんな謡を謡ってこようが恐くないんだ。それが自分で謡えていないと「コミ」が取れなくて、どうしても恐る恐る文字に当てるように打ってしまう。それじゃダメなんだよ。玄人とは言えない。若いうちは耳も良いし感覚も優れているからそれでイける事もあるけど、歳を取ってくるとそれじゃ全然通用しないんだ。

◆先生のおっしゃる上手い謡というのは具体的にはどんな謡でしょうか？

忠雄

昔の喜多流には福岡周斎という人がいてね。よく地頭をされていて私もお相手させて頂いたけど、それはもう凄い迫力なんだ。

「グワァ〜！」って周りに唾を撒き散らさんばかりの勢いで謡うんだよ。もう「上手いも下手もあるか！」という感じだね。当時はそんな方もいたから上手い謡というのを口で言うのは難しいんだけど。でも強いて言えば「謡を転がす」という事はあるね。

◆「転がす」というのは？

忠雄

例えば湯谷のロンギの「河原面を過ぎ行けば」という所。これを「か・わ・ら・お・も・て・を」なんて文字を並べて謡っていたんじゃダメ

だね。「かわら」を詰めて「おもてを」と膨らまして謡う。また「すぎゆ」と詰めて「けば」と少し戻す。こういった事が「転がし」だね。

ただ、どんなに謡を転がしても二拍に当たる「ら」の字、四拍の「て」の字はキチツと拍数に当たっていないといけない。二拍と四拍はこちら側の「コミ」だからね。こういった事が自在に出来る人の謡が「上手い謡」なんだよ。

◆最後になりますが忠雄先生の今後の抱負があればお教え頂けますか？

忠雄

私の場合はもう曲は何だっというんだ。いや、ホントに。ただ良き相手とやりたいね。それはお前さん達でもいいんだ。芸は年齢じゃないからね。三〜四十代でも名人、名手はいるし、六〜七十代になったってダメな者はダメなんだから。

能の事をよく解っていて、ちゃんとした謡が謡え、舞が舞えて、いい鼓が打てる。それでもってやる気のある子達と舞台をやりたい。年なんて関係ないんだよ。だから色々舞台を見ていて、「あつ、ここにいるな。あそこにいるな。」と目星を付けておいて、自分が舞台をやる時には息子に「よし、あいつ等を集めろ！」って集合をかけるんだけど。

良き相手と共に良き舞台をする。

もう私の場合はそれしかないよ。



能「卒都婆小町」シテ 大島政允 大鼓 亀井忠雄 小鼓 成田達志 笛 杉 市和 (2008.11.30) 大島定期公演

俳句と喜多流と福山

I 俳諧と喜多流

俳句と能楽に関係があるというと意外かもしれませんが。しかし、俳句の母体である俳諧は、謡と共に庶民の間でも流行し、江戸時代前期、謡曲の文句を句に断ち入れる「謡曲調」という作風も流行しました。喜多流に絞っても俳諧との間に次のような関係があります。

明暦四年(一六五八)六月十二日、喜多流の流祖七大夫長能の長男で京に住んだ左京(寿硯)の子清七生敬が、岩倉黄門邸での俳諧において、執筆を僅か十一歳で務めた記録(『隔賞記』)があります。執筆は、連句を主導する宗匠を助ける重要な書記役。その座に彼を伴った俳人、貞室の編んだ『玉海集』には左京らの句が見え、一家で俳諧を嗜んだことが解ります。

伊賀上野(三重県伊賀市)出身の芭蕉は、領主の藤堂家が採用した喜多流の謡を学んだ可能性があります。初期は「鞍馬天狗」の文句を採った「月ぞしるべこなたへいらせ旅の宿」のような謡曲調の句を作りました。しかしそれに止まらず、『笈の小文』や『奥の細道』では自らを能のワキ僧のように描くなど、能を俳諧に生かした俳人です。

江戸中期の俳人蕪村には次の句があります。

口切や喜多も召れて四疊半

喜多真王 氏

昭和36年7月3日生まれ。

昭和61年3月 上智大学大学院博士前期課程修了。文学修士。

平成15年4月1日 母方の伯父喜多節世の養子となるも、9日節世が急逝。

平成15年5月 株式会社喜多流刊行会代表取締役社長に就任。

いわき明星大学・東京農工大学非常勤講師。

俳文学会・能楽学会等会員。

「若葉」同人。俳人協会・伝統俳句協会・上智句会・横浜諷詠会会員。

喜多流刊行会 社長

喜多真王

その年に採れた茶の封を切る口切の茶事(冬の季語)に喜多太夫(家元も召されて茶室の半畳に(観世・宝生・金剛・金春の四座の大夫は四畳に座しているという意です。当時喜多流が格下という訳はないのですが、歴史の長い四座と区別する意識は一般にあったようです。なおこの句が詠まれた明和七年(一七七〇)、喜多古能が九世の新家元になったという時事も蕪村は踏まえたと言筆者は考えます。古能は、『寿福抄』(筆者が『国立能楽堂研究報告』で翻刻連載中)、『悪魔弘』等の伝書を著すなど、喜多流の中興の祖となりました。

II 俳句と喜多流

明治時代、現在の愛媛県松山市出身の正岡子規は写生を導入、俳諧を俳句へと革新し、俳誌「ホトトギス」を創刊しました。子規の後継者、高濱虚子たかはま きよこは大鼓を打ち能も演じた人物でした。松山藩のシテ方は喜多流でした。虚子は最初下掛宝生流、後にシテ方宝生流、型は金春流を学びました。

虚子は同じ明治七年生れの十四世喜多六平太の芸を「天才肌」と認めつつ旧い型を鍛錬せよと批判するなど、ライバル心を抱いていたようです。しかし六平太と虚子は協力し合ってもいます。大正二年六月、虚子が「ホトトギス」二百号記念に文芸家を招いて観能会を催した時、六平太は当時麹町区飯田町にあった喜多家の能舞台を提供、番組も決め、「八島」を舞うなど協力を惜しみませんでした。その一方、同十四年、喜多流で松野奏風の肉筆能画幅を頒布した時、讃詠を揮毫したのが、与謝野晶子と虚子でした。翌年、雑誌「喜多」の二月号から六月号にかけて、虚子と晶子の讃詠が掲載されました。「高砂」に讃した虚子の一句を掲げます。

住の江に着く船一つ春の風

また、虚子に学び、「諷詠」誌を創刊した後藤夜半は、十五世宗家喜多実と後藤得三の実兄、大阪の喜多流職分正木亀三郎夫人、来の実弟です。同十三年、虚子は初めて会った夜半に「喜多実さんのご兄弟でせうか」と

言葉を掛けてきたといいます。「諷詠」は一昨年七百五十号を迎え、夜半の子の比奈夫先生が名誉主宰、孫の立夫先生が主宰を務めています。なお、「婦人之友」昭和三十三年二月号に、「能のこゝろ」と題し、喜多実・虚子の娘星野立子・土岐善麿による座談会が掲載されました。

III 福山と能と俳諧

筆者は大島能楽堂に参るたび、福山市内に現存する江戸から明治に建てられた芭蕉句碑を訪れ、今年四月その全て(四基)を実見しました。東深津町の王子神社の句碑に注目しましょう。

扇にて酒くむかげや散桜ちるさくら

残念ながら福山ではなく、貞享五年(一六八八)、『笈の小文』の旅の途中、現在の奈良県での作です。しかし能の所作を詠んだこの句碑が、大島能楽堂のある地の神社にあることは意義深いと思います。



福山市今津町 薬師寺の芭蕉句碑。背後遙かに松永湾が見える。
「今日ばかりひとも年よればつしぐれ」

祖父からの贈物

福山喜多会会員

ナンシー・ロス
(Nancy H. Ross)

ナンシー・ロス氏

カリフォルニア大学リバーサイド校教養学部卒業。
新聞記者、編集者、広報などの仕事を経て93年来日。
様々な翻訳並びに英文編集に携わる。
福山YMCAで翻訳教室を担当。
第4回しずおか世界翻訳コンクール優秀賞を受賞。
第1回黒田藩プレス翻訳賞を受賞。
福山在住。猫好き。

祖父のおかげで私は生まれてから日本に興味を持っていなかった時期がありません。祖父ウイリアム・ロスは、一九四七年に来日し、公務員として連合国最高司令官総司令部(GHQ)に勤めていました。よほど日本が好きだったでしょうが、人形、陶磁器、漆器、掛軸など、とにかくたくさんのおもちゃを日本から持って帰りました。私はそういったものを小さい頃から見て、その美しさと異国情緒に魅了されていました。そしてその興味は今日に至るまで薄れていません。

長年にわたってパーキンソン病と闘った祖父は私が十七歳のとき亡くなりました。今思うと、日本の生活について色々聞けばよかったです。今知っている情報は父にもらった資料からわかった内容だけで、非常に乏しいです。しかし祖父の影響があったからこそ、いつも日本の文化に触れる機会を探っていたのだと思います。若いころは、日本人や日系人の多いロサンゼルスやニューヨークに住んでいたため、日本関係の展覧会、公演、映画などを観る機会がありました。

心の中で、いつか日本を観光したいと思いつながら、なかなかできませんでしたが、ある日「日本がそんなに好きだったら住んでみたらどうですか」と言われました。その一言がきっかけとなって、一九九三年三月に英語講師として福山に来ました。

それから早速憧れていた日本の伝統文化について学ぼうとしました。文楽と歌舞伎は、アメ



W. A. Ross (1891~1971)
ナンシー・ロスさんのお祖父様

リ力で観ていましたが、お能をはじめて観たのは、九三年の夏の「福山八幡宮新能」でした。演目は全く覚えていないし、その場でお能に惚れこんだとは言えませんが、その後よく理解できないまま何回か観にいきました。

十歳からフルートを吹いている私は、昔福山YMCAに篠笛教室ができたとき、早速入りました。そして二〇〇六年の春にメンバーの一人が「能管のお稽古のご案内」というチラシをみんなに配りました。それから八木原周平先生のお稽古に通いはじめました。そのときはじめて大島能楽堂の敷居を跨ぎました。

笛の経験があったため、能管はすぐ音が出ましたが、能楽に関しては漠然とした知識しか持っていなかったのです。囃子の役割などはよく把握していませんでした。八木原先生のご丁寧なご指導を受けながら少しずつ知識を増やして、それぞれの舞を習いました。現在は十月の発表会に向けて練習に励んでいます。

子どもの頃から打楽器にも興味があつて、和太鼓を少し習っていました。大島紀恵先生が

太鼓を打っている格好いい姿をときどき目に見ると、先生に太鼓を教わりたいと思いました。そして、願ったり叶ったり紀恵先生が太鼓のお稽古を始められて、二〇一〇年の一月に通うようになりました。

最初は、「老松」、「杜若」をはじめ、様々な曲の大ノリの部分から習いました。そうすると、謡と合わせる必要があるのです。紀恵先生にそれまで見たことのない謡本のコピーを渡され、大ノリの部分を一緒に謡いました。そのほんの少しの謡の練習がおもしろくて、やがて紀恵先生に謡のお稽古もお願いました。現在は、先生に質問を浴びせながら太鼓も謡も楽しく教わっています。

謡は、言葉、歴史、宗教、文学などの勉強になり、心を落ち着かせてくれるので、大好きです。今年五月の「喜多流春の会」に紀恵先生が「玉葛」のシテを演じたとき、はじめて地謡に参加させていただき、大変感動しました。

あいにく、この顔である限りは、舞台に出るとどうしても目立ちます。その関係で余計な圧力を感じますが、一方その圧力がいい刺激ともなり、人前で失敗しないよう一生懸命努力しています。

お能の魅力を感じている今、唯一残念に思うのは、もつと若い時から始めなかつたことです。これからずつとお稽古をしたいと思つています。祖父が私の活動を暖かく見守りながら喜んでくれているでしょう。



能「花月」シテ 大島衣恵 間狂言 茂山逸平
 (2013.4.21) 大島能楽堂 池上嘉治撮影



燦の会 能「国栖」シテ 大島輝久
 ツレ 友枝真也 子方 大島伊織
 (2013.6.1) 東京喜多能楽堂 池上嘉治撮影

能「籠太鼓」シテ 大島政允
(2013.6.16) 大島能楽堂 池上嘉治撮影



能「邯鄲」シテ 大島輝久
(2013.6.16) 大島能楽堂 池上嘉治撮影

演能ご案内

2013年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月15日(日)	第234回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	お話し 内田 樹 狂言「二九十八」 茂山あきら 能「三輪」神遊 大島政允
9月22日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「養老」 大島輝久
10月12日(土)	広島県民文化祭	13:30	しまなみ交流館	入場無料	狂言「靱猿」 井上松次郎 能「巴」 大島衣恵
10月20日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	素謡・仕舞など
10月25日(金)	繪処能	16:00 19:00	繪処アラン・ウエスト	4,000円	能の音楽
11月16日(土)	平和能楽祭	13:30	アステール能舞台	要整理券 (ひろしん文化財団)	能「隅田川」 友枝昭世 狂言「萩大名」 野村 萬 能「紅葉狩」 大島政允
11月17日(日)	第235回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「景清」 金子匡一 狂言「呼声」 茂山七五三 能「葛城」神楽 大島衣恵
11月19日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・能観賞会
12月22日(日)	大島能舞台 創建百周年記念能	12:30	喜多流大島能楽堂	正面指定 12,000円 中正・ワキ正指定 10,000円 2階自由席 6,000円	能「木賊」 大島政允 狂言「棒縛り」 野村 萬斎 能「石橋」 塩津哲生 大島輝久

2014年

1月3日(金)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社	無料	翁奉納
1月11日(土)	瀬戸内文化のにぎわい	13:30	アステール能舞台	700円	邦楽と能楽
1月19日(日)	喜多流新年初謡会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
3月30日(日)	宗吉史跡まつり	15:30	三豊市宗吉窯跡	無料	能舞
4月20日(日)	第237回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「竹生島」 松井 彬 能「田村」 大島政允
5月10日(土)	繪処能	15:00 18:00	繪処アラン・ウエスト	5,500円	能舞「羽衣」 大島衣恵
5月18日(日)	喜多流春の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	能・舞囃子・仕舞・素謡
5月31日(土)	燦の会	13:00	東京喜多能楽堂	正面指定 8,000円	能「自然居士」 大島輝久
6月15日(日)	第238回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「鬼界島」 金子匡一 能「杜若」 大島衣恵
7月28日(月)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	前売り 4,000円	能「未定」 大島輝久
8月10日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光信寺	前売り 3,000円	能「未定」 大島輝久
8月24日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「半部」 大島輝久
9月21日(日)	第239回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「清経」 大島輝久 能「殺生石」 大島衣恵
10月19日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月3日(祝)	後楽能		岡山後楽園能舞台		能「海人」 大島衣恵
11月16日(日)	第240回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「三井寺」 大島政允
11月23日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「黒塚」 大島政允

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

FAX 084-923-8730

http://www.noh-oshima.com

編集デスク(よ)

- ・9月1日、能狂言が見たくなる講座「能の女たち」のゲストとして豊田市能楽堂に衣恵が招かれました。構成・司会は柳沢新治氏。世界のトヨタが日本の伝統文化普及に地道に力を注いでくださることに深謝。
- ・英語能「PAGODA」の作者ジャネット・チョング女史が10月中旬、来日予定。尾道での県民文化祭の能「巴」を鑑賞予定に組み込んでくださった。6年前偶然、大島定期能を鑑賞されたジャネット女史とのお付き合い、彼女の行動力と優しさに深謝。
- ・6月1日、燦ノ会にて能「国柄」シテ大島輝久、子方大島伊織。東京で子方初舞台。能と歌舞伎のDVDを一日中見ながら、おシテやお脇、はたまた大鼓方の真似をして遊んでいる彼が今後どのように育っていくのか楽しみでもあり、不安でもあり・・・見守って下さる方々に深謝。(大島奏子)

